

# ミステリ読書案内

2022. 10. 20 発行元

第408号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 横溝正史の代表作

横溝正史の「代表作」もまだ取り上げていなかった。とっくに紹介したつもりになっていたのだが…。あまりにも有名な3作を選んだ。まだ読んでいない若者がいたら、是非読んでほしいと切に思うものである。

### 角川文庫に、ほとんどが収録

角川文庫から横溝作品が出るようになったのは昭和46年(1971年)から。よって私が読んだのはほとんどが角川文庫版だった。毎月のように独特の絵がついた横溝の本が書店の平台に並び、それを順番に買ったものだ。

平成の終わりから令和にかけて、角川文庫の「新版」が刊行され、今でもすぐ手に入るようになっていく。以前の表紙絵が少し形を変えて出ているので懐かしいと言える。図書館でも全巻揃えているところがあり、借りるのも簡単。

横溝ミステリの評価はある程度定まっており、第一位は『獄門島』、第二位は『八つ墓村』、第三位は『本陣殺人事件』でよいと思う。選定で悩むようなことはない。これらに続くのが『蝶々殺人事件』『悪魔の手毬唄』『犬神家の一族』『夜歩く』…となるが、それらは次回に回すことにしよう。

私がこの文章を書くにあたって参考に見ているのは、昭和51年頃に発行された『別冊・幻影城・横溝正史集』。巻末に書誌や評論、対談などが載っていて、読み始めると止まらなくなる。「書誌」って本当に大切な記録だと思う。

### NO.3 「本陣殺人事件」

1946年雑誌『宝石』連載。単行本は翌年青珠社から出た。戦後の横溝ミステリの起点となった作品と言ってよい。名探偵・金田一耕助のデビュー作。冒頭ディクソン・カーの「密室の殺人」について書かれ、ルルーの『黄色い部屋』への言及もある。そして始まる岡山県物語。江戸時代に本陣だった一柳家の末裔。昭和十二年のこと。長男の賢蔵と新婦の克子は結婚式の後、離れに引き上げた。その夜に不気味な音とともに惨劇が起こった。離れを取り囲むのは誰の足跡もついていない雪の原。たまたま久保銀造の家に遊びに来ていた金田一耕助は探偵としての活動を開始する。日本のミステリの歴史の中で忘れることのできない名作と断言できる。

### NO.1 「獄門島」

1947年雑誌『宝石』連載。翌年まで連載が続いたので単行本は1949年に岩谷書店から出た。日本ミステリの最高峰に挙げる人もおり、私も日本ミステリのベスト3のひとつに数えている。「見立て殺人」の代表作であり、「本格謎解き」の醍醐味を感じさせてくれる傑作。

金田一耕助は『本陣殺人事件』のあと招集され戦地に赴き、かろうじて戦争を生き抜き、復員の途につく。ニューギニアからの復員船の中で病気の鬼頭千万太を看取ることになる。彼の依頼を受けて、瀬戸内海の小島・獄門島を訪ねるのが最初のシーン。この島には本鬼頭家と分鬼頭家があり、亡くなった千万太は本鬼頭の長男で跡取り息子の立場だった。耕助は千万太の最後の様子を家族に伝える。千万太には三人の妹・月代・雪枝・花子があり、彼女たちがこの物語の中心的な役割を果たす。それぞれに美しいが、狂い咲きのような側面があり、本鬼頭家の将来が不安視されている。三人姉妹は耕助の到着後、次々と事件の被害者になっていく。梅の木に逆さに吊り下げられたり、吊り鐘の中に閉じ込められたり……。それぞれの殺人に発句がつけられている。大きな陰謀の中に巻き込まれてしまった耕助は必死に考えを巡らせて事件の解決に挑む。

### No.2 「八つ墓村」

1949年雑誌『新青年』連載。途中で中断となり続きは『宝石』に移った。単行本は1954年に東京文芸社から出たのが最初ではないだろうか。多くの人に知られた作品。

「八つ墓村」とは岡山県と鳥取県の境に位置する村。戦国時代に毛利氏に迫られた尼子氏の落ち武者が8人村に逃げ込み、残党狩りを恐れた村人が虐殺したことに由来する。その後も村では悲劇が続き、大正時代の終わりごろには、村の有力者である東屋の田治見要蔵がちょっとしたことから村人32人を殺す事件が起きた。その時の姿が凄まじい。詰襟の洋装に脚絆を巻き、頭に白鉢巻。その鉢巻きに懐中電灯を二本角のように立て、腰の帯には日本刀、手には猟銃という姿。それから26年経った戦後の出来事が本書の内容。主人公は、神戸に住む寺田辰弥。彼の元に村から遣いが来て、彼が要蔵の次男に当たることを説明し、長男の久弥が亡くなりそうなので、後継ぎとして村に戻ってほしいと頼まれる。辰弥が田治見家に足を踏み入れることで、新たな惨劇がスタートしていく。迷信と呪詛に怯える村人たちに連続殺人が。残されていた地図と鍾乳洞…。村のもうひとつの有力者・西屋の野村家に逗留していた金田一耕助が駆り出されることになる。